



傾城情史大容

戲文狂詩集
周亭京鶴天傑著

^13
4294



2
215
13
4294

天保壬辰新刻

洛東関亭京鶴述

早稲田大學教育學部

傾城情史 大客

道樂點



此書ハ百年先生の經典餘師みたる也 二十五年全盛たる嫖子
倡妓の心理をばくしと粹と滑稽替はるる彼に有ては孝懐忠信
あつたに於てハ大抵無心とつふ所を知らぬ夫子ハ温良恭儉讓と梅幸
幽美狂言上手といふ事まぐ悉く註釈を以て大通乃珍各々
諸客通入の門也 京都書林 晴轉堂發行

傾城情史自序

雄乎

古語曰有龍妓女之陰溝常殺人然不見
血余欲見其龍之形耽溺烟花已久矣今
歲雖偶見自贖筒之裏蛇出味見自妓女
之陰溝龍出以謂龍常出余之通力不足
而不能視故焦思單心益耽溺矣一夜登
於嶋原之合翠樓夜及闌倚妓寐傍若有
二神謂余曰吾輩是中華之薛敖曹及
本朝之弓削道鏡之靈也汝欲視自妓女
之陰溝龍出耽溺狹斜可謂勉矣多々致

有字
字眼

意語汝夫妓女者腰不厭細帶不厭廣巧
笑備兮美目眩兮以其妖艷惑人猶野十
必不可有不察之矣亦自彼的之陰溝龍
出也徒擊中雲雨之情不拂其雲雨則難
視拂雲雨也有術焉為汝傳一書空熟讀
之耳言終而授一卷余蹲踞而受之時曉
鴉聒耳噴嚏而寤打嚏而覺則是南柯之
一夢也於是余知神來通之看傍果而有
書題大客輒雀躍而一繙一時得了其術
焉余之喜亦可知而已豈度其書哉亦倚

花魁之膝採禿頭之筆註之以國字終托
剗厥氏刻成更名傾城情史願遊斜郎請
焚香讀了之得視彼龍之形免其害矣
天保辛卯秋八月金琵琶頻啼夜便煙草
火摻毫於六曲屏風中

洛東 関亭京鶴



序 凡列

附言

一 此書本客を親方とて瑪兒を奉公とあるの意尤多し一此通俗の便りとて又その文頗る野鄙なりとあれども亦夢中神人より授りし書以て看宦を誹謗を為すおれそ誹謗する時忽ち其罰を蒙るべし

一 總て此書の文倭にあらず又漢の如く按ずる中華と本朝との二神ありしと授りしをみればかくあらんや

一 註の文ふいといの假名違ひはあべし一刻をいそぎくきみまれば花魁の排軒さておめて飛をかりぐ絲ハ文字足のりとかく鳥けらごとく雀のちうありと推した中人や大鵬の諸君子

京鶴再識

大客

酒氣章句

酒ハ氏氣ハ名なり世ハ大酒先醒と云此一卷の章句と分ちたまへる也酒氣章句と早口小色欲とすむべし

酒酏子曰大客古之妓書而祓客入通之門也當時可見通人為客次第者獨頼此篇之存而枕辰次之客者必由是而遊焉則庶乎其不溺矣

此酒の書ハ世の廓ハあはれびの通人とする門ロありむの通人の廓ハあはれびの次第を當時あるべきのこは書の存るゆへに初めの書よついでに籍枕辰巳婦言の二書を見るなり廓ハあはれびのこはるこの書のそくハはるがいはる



恐るべし 事至而后財盡財盡而后意無實意

無實而后始悔雖悔怨無詮方

自太夫以至於辻君

壹是皆以有實為表

而添遂者否矣其所實者實而其所虛者虛

未之有也

右一章蓋好莫之言而古駒齋述之此奧

十章則大通之意而粹人記之也舊本頗

有誤今因酒酌子所定而更考郭中之趣

別為次第如左

上の夫密之道

一 章とりのり

つくる御方が述

とて十ヶ条ある

方が記せ

十ヶ条の次第

十ヶ条の次第

十ヶ条の次第

十ヶ条の次第

十ヶ条の次第

十ヶ条の次第

詰詰曰克明實

詰詰ハ告ると同ク詰ハ告るなり是ハ疑の間夫ハ詰けて

大鼓曰顧是天之明

時ノ太鼓を聞ひつげとはや

別ををりて袖のあつて去はると是も身あが
別として問夫ハ夜のこをり詰曰あけのうとと
鐘ノ男ハ藁荷を食して時ををりて抱附曰如此

美男有唐士乎

別を今抱つてらん男ハ唐も
あろうとゆりけ服の文ハ

若界の中はたのしみをり愚佛先生が詩曰く
更ハ一服を勧めて復抱腹と云はるるなり
皆自真

實也

右の三ヶ条と云はる
間夫への真實なりと云

右第一章記明真實

右真實ハ間夫ハありことと
のべんとてむりの通人との

方燈銘曰苟日新日日新十客萬來

方燈銘曰苟日新日日新十客萬來

軒あんどのの書付ハ十客萬來の四字と
めつてを懸たんとすつて毎ぐふなりと云

入來

禮狀のわつりハハのゆり
御連中様ぐ

使曰君雖難面其思維切

使曰君雖難面其思維切

通ふことハ去るなり打絶てあれハ文をりちて牽頭
みど使とまりて來りありハつと云はるなり

是故野夫無所不乘

是故野夫無所不乘

其言

其言ハ口車ハその口車ハ乘り
口車ハその口車ハ乘り

右第二章記引客

歌曰凡千里惟人所近 思て通へを千里が一里あは

初花曰庭前黃蝶宿 此段ハ下の意とがら

于枝上於宿知其有雌雄可以入而不如蝶

卒 此ハ箱根の靈現いざりの仇討九ツ目の詞 古諺曰

文武久茶釜噫泡吹毛化為人妻止於氣隨

為人妾止於驕侈為奉公人則止於間夫與

客人接則止於無心 この古諺ハ今ハ

て玉のころとりのことあり 實のころとりのことあり

時曰見彼川邊綠柳猗猗有美藝子如梅如

櫻如竹如藤眉兮目兮鼻兮只兮有美藝子

實不可忘兮如梅如櫻者道愛也如竹如藤

者道風也眉兮目兮鼻兮只兮者顏能具也

有美藝子實不可忘兮者道一目見者之不

能忘也 其角の匂小 傾城の賢 やみ 柳哉

小て女郎 藝子を見ろ 顔とりの風俗とりの

うつくし 藝子の柳 時曰ハふと時小のぞん

わを 五

時曰嗚呼其姿不

忘大夫賢其賢而品其品執子愛其愛而風

其風此以没世不忘也

世風をことと藝子こぼるるをかりの愛をりちて當

見ろりの生涯わをれどとる也も野考へにま

久味の仙人の野夫の親玉でありりんを

右第三章記人情與風俗

婦曰表實吾猶人必也使勿實乎無腹者不

得盡其情大乱客心此謂身之勤

姉女郎と告て

我も他の女郎御密小實をれりてまは

とち所を御密へ真實あつたを親お

情をほくさんぎとるを心よりわわい小

御密のころを草や服を根小して風小さく

右第四章記姉傳妹

此謂身之勤此謂客之氣取也

酒氣此下へ焼酎のちをかへた

右第五章蓋記爲勤之義而今亡矣

この段ハ只右第ニ章とをりり蓋とりり

年明焉則身體自由無不儘而吾心之願

無不成矣此謂年至此謂年明也

とれたわが身わが身のすゝめ成就をこまを

たのしみふとく親方ののまづれを

所謂為表實者毋出處於面也如好惡真如

惡好色此之謂為勤故通人必慎弱也

あゝき真は〜も好〜い〜を〜

た出〜もひ〜のま〜ど〜の嗜ふ〜

ふいつりりひ色をりごきこと通人ハ其食言

か妓女の業をた〜と〜通〜わきま〜

妓女寸間逢間夫無不憚見客人厭然捨其

間夫而偽之妓之視客如見其肺肝然則何

實矣此謂無實於中有實於外故通人必慎

弱也親方の手前を〜めり〜わづら〜

つり〜のさ〜間夫の〜と〜押〜厭然客を〜

肺の臟肝の臟〜の〜り〜わ〜程〜

りれ〜色〜ふ〜あ〜

親父曰親類所言世間所指其誠乎

所謂崩其身在所奪其心者之其所可愛而

感焉之其所首尺而惑焉推而知其

虚察而知其情者天下鮮矣可愛と思ふ

かゝるの段ハ其情ヲ知ルニ通人ハ世ハ知リ察

古語有之曰人莫知我顔之惡莫知我

尻之臭ぬるたことかよひのこゝとあり人か

此謂自不察不

察して知る事なれどいとは推して知る事あり

可以至通人

右第八章記推虚察情

所謂察情必勿惑者其身惑而能知情者無

之故通人不為惑而推情於廓孝者所以事

親也弟者所以事長也推者所以接妓也

妓女の情を察するは其の衰ありて身まよ

をわはせてその情を知る者を知るなり

推親ハ妓女ニ接するは弟ハ老推粹声相通

粹人推尊を近松子曰如鶏卵之用心誠察

之雖遊無溺矣未有邊漢之救立與妓女之

真實也近松子ハ遊門九衛門ノ傾城ノ真實

ことあはれぬとやいふとありきんを妓女の真實い

し知るはたハ廊ハあそびとていふ心をもつてハ

一両金一刻費之一貫錢一刻遣

之一外酒一刻飲之其氣如此此謂一婦破

家一人潰家これハ妓女を受け出して妻とあはれ

椀久靡松山以通而彼從之

藤伊靡夕霧以推而彼從之費其財無其通

をいひけうけて扱てそは間をさせよとあはれども

そは間ハりきとていふとありきとて舉の上へと

り人をその舉正もとりいりて密かるといふ

乗とて酒を此謂薦酒在乘其興

右第九章記所以接妓與妓之夏

所謂在通郭中者客妓妓而妓不偽客吾吾

而妓不欺是以通人有大通之道也

妓女ハ親のこめきんハ兄弟ハこめきんハ苦界

ハ妓の道をかちまハ移むありて吾ハ吾の

所父母之惡勿以接妓所兄

弟之惡勿以接妓所朋友之惡勿以接妓此
之謂大通之道

父母兄弟朋友の悪を接してはならず、
母兄弟朋友の悪を接してはならず、
母兄弟朋友の悪を接してはならず、

時曰捻梅鶴菱筭之紋妓之所

好好之妓之所惡惡之此之謂當時風俗

當時の風俗を諷するなり町々ハ
此風俗を見ず梅つる癖ハ
此風俗を見ず梅つる癖ハ

時曰節季彼難澁維胎蠢蠢遺線思案唯當

方暮接妓者不可以不慎過則為雜炊之炊

矣 世の野夫ありては節季はつて

古人曰良兼之未亡師直克遊於

廓儀監于彼中義不忘道得通則得志失通

則失志 由良の之が師直を討ぐ

通を世の人心を志す由良の之が師直を討ぐ

假名本 是故通

人必脩于通有通此有推有推此有察有察

此有情有情此有色 是此有通 是此有通

通者本也色者末也外本内末為妓所奪

是故本色則

惡氣增本通則惡氣去

而欲出者亦惡氣而還風惡氣而欲慰者亦

惡氣而舞

實よくらんと亦いやみふしうらむとハ
茶屋の二階より下りけりてまきまき
坐へるふみせでとめあはれりて
さて風つゆみゆふの田舎大臣ハ
風まがりけり手ぬぐいの
持つ筆より大のてらひハけりて
その親方曰惟命不于常道流行則止之
不流行則換之矣
らぬハとれ天運なりさるる
る
請狀曰諸親類兄弟者不及言與言
名附夫及先主人杯申致奉公之妨者決無

推みてハ間ニあハれども真のまゝと
唯通人父

父母母妓妓此謂通人能愛妓能惡妓

通ト極妓ハるごとく又母事通ト

見馬而不能騎騎而不能鞭怖也見妓而不

能察察而不能遠弱也

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

其儻の情を察するを察するを察する

野夫遊廓ホヲアノクニニサイガイナラヒイタレイモアリニツラジン並至雖有通人亦無如之何マタナシイコトヲヤシキ

矣故唯男不以色為色ユニニタガ可以通為色也ベキモツテツウヲスイトナリ

野夫ノヲ遊廓ユクニ並至ナラヒ雖有イモ通人ツラジン亦無マタ如之何ナシイコトヲヤシキ

野夫ノヲ遊廓ユクニ並至ナラヒ雖有イモ通人ツラジン亦無マタ如之何ナシイコトヲヤシキ

野夫ノヲ遊廓ユクニ並至ナラヒ雖有イモ通人ツラジン亦無マタ如之何ナシイコトヲヤシキ

野夫ノヲ遊廓ユクニ並至ナラヒ雖有イモ通人ツラジン亦無マタ如之何ナシイコトヲヤシキ

右第十章記更穿市中與廓中之吏以通ミダヤノシヤウハキフサニニツクテシヤウ

為色スレタケイロト

凡十章前四章如床盃後六章如三三九オソシウシヤウマヘシヤウハゴロトコサカキニシヤウコトニサニサニ

度盃其第五章乃可慎之要第六章乃可ドノサカキソノダイゴトヤウハスナキベキツシムヨクダイロクシヤウハスナキベキ

恐之本在初客尤可得意之急讀者不可オソルニトアリニシヨカカニモツトモベキノコトヲキウナリヨムモノスベカラ

為打嚏也スアシシヨ床盃トコサカキ後六章如三三九トコサカキニシヤウコトニサニサニ

為打嚏也スアシシヨ床盃トコサカキ後六章如三三九トコサカキニシヤウコトニサニサニ

為打嚏也スアシシヨ床盃トコサカキ後六章如三三九トコサカキニシヤウコトニサニサニ

為打嚏也スアシシヨ床盃トコサカキ後六章如三三九トコサカキニシヤウコトニサニサニ

為打嚏也スアシシヨ床盃トコサカキ後六章如三三九トコサカキニシヤウコトニサニサニ

大客畢 千秋萬歲樂

跋

京霍君姓花川戶字助平髮俠客風亦
 鬻脚蛇頭其先江戸人乃助六之後裔
 也性質陽而非陰而非陰酒雖不嗜
 常如醉癡雖不好亦胸有一物自少愛
 狹斜及長能探其幽嘗自欲見潛於妓
 女之陰溝龍之形授這太客一卷於神
 可謂奇矣今公之也其意無他蓋在欲
 使世之煙花的至大通嗚呼君能引通
 哉

浮世繪師

菱川清春記



91

79

